【206】

氏　名(本　籍)	島岡　丘(しまおか　たかし)(東京都)
学位の種類	博　士(言語学)
学位記番号	博　乙　第　960　号
学位授与年月日	平成6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	中間言語の音声学 ――英語の「近似カナ表記システム」の確立と活用――

主　査	筑波大学教授		芳賀　純
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	草薙　裕
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	原口庄輔
副　査	駒沢女子大学教授	文学博士	小松英雄

論　文　の　要　旨

ある言語の音声をすでに習得している者がもう1つの言語を外国語（目標言語）として習得するときに，最初の言語の音声体系が次の言語の音声に干渉して，第2の言語の音声の正確な習得がさまたげられることが多い。本論文は，日本人が英語の発音を習得する際の始期から完成までの段階を中間言語（interlanguage）としてとらえ，両言語の音声を共通に記述する枠組みとしての33四角形モデルと「近似カナ表記システム」を案出し，これらを用いることによって日本語としての発音から英語らしい発音に移行させ得ることを，実験法を用いて証明したものである。

論文の構成は次の通りである。

序論

第1章　中間言語とその意義

第2章　目標言語の音素習得段階

第3章　部分異音より目標言語の音素体系へ

第4章　音声変化（同化現象）の近似カナ表記

第5章　33四角形モデルの実証と効果

第6章　音素習得の方法

第7章　結語と展望

序章は，本論文構成の基本的立場を述べた部分である。著者は日本語使用者が英語を目標言語として習得する過程のモデルは実用的・応用的妥当性を持つべきことを強調し，未知の英語の発音の習得過程は母語である日本語のそれから干渉を受けるが，この習得過程において示差的特徴に基づいて作

成された「近似カナ表記システム」を利用することによって英語音により効果的に接近することができると述べている。

第１章では，まず日本人英語学習者の英語音の習得段階を(1)「母語音声体系段階」，(2)「音素段階」，(3)「特定環境における音素（著者の言う異音化された音素）習得段階」，(4)「同化現象が自然にできる段階」，そして(5)「音声表記活用段階」の５段階に分け，著者の提唱する「近似カナ表記システム」はこれらの初期の段階でその効果を発揮するものとして位置づけている。また，この「近似カナ表記システム」は過去に日本の英語教育で用いられることのあったカタカナ英語とは異なって極めて効果的であることを日本語の地名・会社名等の近似カナ表記と比較して示し，この近似カナ表記で記述された中間言語を利用することによって日本語から英語への「橋渡し」ができると述べている。

第２章では，日本語と英語の母音および子音をそれぞれの持つ示差的特徴の中から，調音位置と開口度をとりあげ，33四角形モデルを作り，そのことによって両言語の母音と子音の体系を共通の枠組みに位置づけることができることを示している。また，33四角形モデルの作成には，音声学者（イギリスの Jones (1958), Gimson (1980), アメリカの Kenyon-Knott (1953), Wells (1990), Ladefoged (1982) など）の諸説を検討し，１つの音声図で２言語のしかもその母音と子音を同時に記述することが可能であるという考えに至っている。

第３章では，目標言語の音声環境の中での音の対立が，日本語の音声環境の中では失われる（例えば／r／と／l／）という現象を「部分異音（partial allophone)」と名付け，その主要な例を閉鎖音，摩擦音，接近音に分けて「近似カナ表記」でより正確に記述している。

第４章では，「近似カナ表記システム」の適用を音素のみに限らず，それらの連続を語中ならびに語と語の連結に関して検討し，特に母音や子音の脱落，弱形への変化，同化現象，さらにはストレスやイントネーションに対しても著者の提案した「近似カナ表記システム」による記述が可能であることを示している。

第５章は，以上著者が作成した「近似カナ表記システム」を実際に使用して，日本人英語学習者に発音指導を実験的に行い，学習者のアンケートに対する反応と，指導前と指導後の英語発音の変化をサウンドスペクトログラムに基づいて分析した結果を示しているが，「近似カナ表記システム」を利用することが英語音声の習得に促進的効果を与えたことが示されている。

第６章は従来，日本で行われてきた英語音声指導の原則に，著者の提唱する33四角形モデルに基づく「近似カナ表記システム」による知見を加え，かつ日本人学習者による英語音声学習素材の難易度を考慮した詳細な音声指導の具体案が示されている。また，この方法による指導がアルファベット習得時からすでに始まっていることに着目し，その26文字の呼称を「近似カナ表記システム」で示している。

第７章は，著者による本論文全体の意図のまとめである。中間言語を外国語学習で利用できるということ（第１章），利用すべき中間言語を「近似カナ表記システム」で示したこと（第２章），「33四角形モデル」と「近似カナ表記システム」に必要とされる「異音と部分異音」（第３章）と「同化」（第４章）を処理し，「近似カナ表記システム」の中に位置づけたことが述べられている。また，「近似カ

ナ表記システム」の有効性を実験によって証明し（第５章），あわせて，このシステムを利用する音声習得の方法も示されたとまとめている（第６章）。

審　査　の　要　旨

本論文に示されている著者の見解の一部はすでに専門雑誌等で公表され，日本の英語教育における音声指導において大きな影響を与えるものとして評価を得ている。従来，日本の英語教育においては，カナ表記がさまざまな形で利用されてきたが，それらには，一部の提言を除いては，体系的でなく，科学的研究に裏打ちされたものではなかった。著者による33四角形モデルは包括的かつ体系的で，過去のカナ表記の欠点を補い，しかも最新の中間言語研究の知見に支えられ，実際に使用して有効であるという証明も伴ったものであるという点で高く評価できる。

著者は，「近似カナ表記システム」の基礎として，従来全く試みられることのなかった日英両語を共通に記述できる33四角形モデルを，調音位置と開口度を示差的特徴に選ぶことによって作成したが，これは日本の英語教育の研究では最初の試みである。このことは，一方では中間言語研究の促進に貢献し，他方では日本における英語学習者のより効果的発音の習得に資することになり，本論文の最もすぐれた貢献である。

なお，本論文の構成について希望を述べるならば，各章間の若干の記述内容の重複を整理し，「近似カナ表記システム」に用いるカナ符号の使用ルールを論文中にまとめて示すということが望まれる。しかし，そのような問題があるとしても，そのことが本論文の水準や価値を低めるということにはならないであろう。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。